

日本書紀傳 卅二卷

百四十一

和書
一〇五二號

内閣文庫			
番號	和	10522	
冊數	156	(150)	
函號	特	85	1

内一三六八三號



文庫印

清印

高野印

日本書紀傳三十二之卷

神代下第二 天孫降臨章 穗積重胤 謹撰

一書曰天照太神勅天稚彥

曰豐葦原中國是吾兒可王

之地也然慮有殘賊強暴橫

惡之神者故汝先往平之乃

日本書紀傳三十二

〇一

内一二六八三號

タニヒテ アノノカ コ ユミ、ニタ アノノニ カ
賜天鹿兒弓及天真鹿矢遣

クニヒコニ、ニアメロカ ヒマ ムケクニリミマシラフ クタリキタリテオスナナチ サハニ メトリテ
此天稚彥受勅來降則多娶

クニツカミノ ムスノヲノナルニブ ヤト セニ カヘリコトニヨサハリキ
國神女子經八年無以報命

此傳ハ凡て天穗日命の御事とバ略り載りし事
其始て征伐と爲り天稚彥と天降りせ給へり事
件より書し初り後其神の忠誠ありし事
由り依り天神の御討し遇奉り反矢の御事し依り立

處小器りれり天上より天國玉神及其妻神子の
神等の降來て其葬事小預りける云々の事共畢り後
小既而天照太神以思兼神妹萬幡豐秋津姬命配正哉
吾勝速日天思穗耳尊爲妃令降之於葦原中國是時
勝速日天思穗耳尊立于天浮橋而臨睨之曰彼地未平
兵不須也頗頌凶目杵之國與乃更還登具陳不降之狀
故天照太神復遣武甕槌神及經津主神先行駈除之有
ハ大小次序も違ひ又道理も背ける事あり有べり
りけり然るに此小天照太神勅天稚彥曰豐葦原中國
是吾兒可王之地也然慮有殘賊強暴橫惡之神者故汝

先往平之と有が如く此國の殘賊強暴横惡之神と云
者の有る依^てこり天稚彦^神と其征伐と爲て降^し給
ふ御事ありし然るに其殘賊強暴横惡之神を其事
向だふ爲りける間小己小其神の滅亡し其邪惡
の鬼神共と專所と得^て盛小荒振り時ありけり然る
と其征伐の御政も未竟とせ給^ふ中間小天神御
子と天降^し奉^りせ給^ふと云理^は且ても有^り御事あり
けり御事ありし有^り思^ふ其文に彼地未平矣
不須也頗頭凶目杵之國歟と有り御言小依^れ其中間
小在^り事と思違へし不意^に此^は移^る者^{なり}

△其事下許小論
定めては待見て

りければ何れも錯乱なり事を得ず
正有^りけり第一書^の如く天稚彦の事果て後小經津主
神武甕槌神と天降^し給^ふ所^は初^に書^に初^に書^の如く
格別あり事あり云限^り非^ず雖も此^は一書^の如く
其次序の乱れ正然^に右^に引^き天忍穗耳尊の
初^に御天降^の文^に此^は正書あり漏^れたり此
小傳ハる^に甚^に美^に事あり雖も其置^を行^はれ
る者めて實^に在^る所^は必^ず無^しる事實の上小大
り誤を生ず事あり在^りければ甚^に賜物あり然^る物
て此^は大^{なる}論有^り事已^に傳^せ十一^三小注せるが
如くして古事記御天降段の初^に天照太御神之命以

豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者我御子正勝吾勝
速日天忍穗耳命之所知國言因賜而天降也於是天
忍穗耳命於天浮橋多志而詔云豐葦原之千秋長五
百秋之水穗國者伊多久佐夜藝爾氏有邪理告而更還
上請于天照太御神と有_レ此の石引_レ文と其義專
相同_レと其御天降の所_レ故建御雷神返參上復奏
言向和平葦原中國之狀尔天照天太御神高木神之命
以詔太子正勝吾勝速日天忍穗耳命今平訖葦原中
國之白故隨言依賜降坐而知者尔其太子正勝吾勝
速日天忍穗耳命答白僕者將降裝束之間子生出名天

迹岐志國迹岐志天津日高日子番能迹_二藝命此子應
降也此御子者御合高木神之女萬幡豐秋津師比賣命
生子天火明命次日子番能迹_二藝命_一也_二見元_レ也
と此_レも二神乃昇天復命而告之曰葦原中國皆已平
竟時天照太神勅曰若然者方當降吾兒矣且將降間皇
孫已生號曰天津彦火瓊杵尊時有奏曰欲_レ以此皇
孫代降と有_レ文の精粗_レ有_レけ_レ其傳_レ同_レト
け_レけ_レ此_レ一書と古事記と_レ專_レ一_レあり事を知_レ其
次序と考ふ可_レ事云も更あり_レ然_レ一_レ書
ふ_レ其始と略_レて此所_レ至_レ則以高皇產靈尊之

女子號萬幡姬配天忍穗耳尊為妃降之故時居於虛天
 而生兒號天津彦火瓊杵尊因欲以此皇孫代親而降
 故以天兒屋命太玉命及諸部神等悉皆相授且服御之
 物一依前授然後天忍穗耳尊復還於天と有ハ大小同
 小キガ如ク一ト大ハ異多ク所有リ傳ル者あり其
 事次小云ベ一第六一書の始ハ天忍穗耳尊娶高皇產
靈尊女子杵幡十ニ姫萬幡姬命云々而
生兒天火明命天津彦根火瓊杵尊於葦原中國也云々有テ始リ
降皇孫火瓊杵尊降一本レセテ神議の御在リ坐リ其異ハ
瓊杵尊と降一書と同ト傳ル者あり其異ハ
 所有ハ就テ大ハ得ベシ事多ク有リ然ルハ傳
 廿一二十丁八百小注ルガ如ク其第一書ハ前後の
三十三丁

事のハ相混淆ル者あり少ク時居於虛天而生兒
 云時ハ此ハ是時勝速日天忍穗耳尊立テ天浮橋而
 臨眺之曰と有小時の事あり可一其故ハ此ハ古事
 記ハ降ありと裝束ハせ御在リ坐一間ハ瓊杵尊
 坐生坐ハ趣ムテ虛天と云ベシ事實の有ル事無レバ
 あり其上天火明命ハハ瓊杵尊ハ御兄ハ坐す由
 古事記ハ此右ハ如ク見元此ハ第六一書第八一書
 也右ハ同ハ趣ありハ此其天火明命の天降坐一ハ傳三
 十百丁小注ルガ如ク大己貴命ハ彦名命ニ神の國
 土を經營ルセ御在リ坐一間の御事あり然ルハ其

古事記卷之三十一

火明命ハ一也御自思ハ一立一て天上より放^つれて降
る^る給ふ可^き小非^は此ハ其天忌穗耳尊の天降^り
せ御在^り坐^りける時小御父子共小出立^り御在^り坐^りけ
るを未^だ此國の平安あり^き給^ひ御父天忌穗耳尊
ハ虚天の天浮橋より一返上^りて給^ひ天火明命ハ
其より豊受大神の御靈を供奉^して丹後國の地小
降著^せ御在^り坐^りける可^き事已^し傳^せ廿一^十
十七^丁小注^らが如^し然^らば虚天小於^り御兒生坐^りと云
ハ天火明命小坐^り瓊^玉杵尊小坐^り其天忌穗耳
尊ハ引返^りて天浮橋より天上小升^りて御在^り坐^りけ

り小對^へて天火明命の其より^別天降^りて給^へる訖傳
あり可^き其天火明命の事實より微^して天忌穗耳
尊の先小天降^りて給^へり一時世を^知べき故^に大
あり賜物ありと云^{あり}けり其天火明命ハ一也磐
々其御子天香語命ハ一也石凝姥神小御在^り坐^りて
御年己^し小若干小御在^り坐^りて虚天小生坐^り可^き
も非^ず又瓊^玉杵尊を爲^り時ハ天穗日命の巡察使も
天稚彦の征伐使も後^に經津主神武甕槌神の事跡も
何も過^りて給^へる御年若干小御在^り坐^りて
と甚^く種^くて天降^りて給^へる趣^{あり}合^はりけり
此二柱小係^りて虚天小生坐^り御事を申^り當^りず
又後^に天忌穗耳尊の虚天小天降^り給^へる間小生
坐^りと云^{あり}愈^に當^り然^らば其天忌穗耳尊の初^めて天
降^りて給^へる虚天小御在^り坐^り間ハ大己貴以

彦名ニ神國土經營の最中ふて有つるが天穗日命と
天降一給へる頃間ハ已小其以彦名神ハ常世郷ハ渡
し世御在ー坐ける後の事ふて大己貴神天下を悉く
小造給ひ畢らせ御在ー坐て頭國王神と聞えさせ
間の御事ある由傳世一百四十丁小注々如くありけれ
ハ許多の年數と隔在つる事と所見たり然れども外
小書り可き事實の無が故小天穗日命の御事ハ直小
續けしれりれども國土上於ても然り沿革の有る事
ありけるふて其間の久しき事之も敢て程の隔る
りー事と想像り奉るるあり然るに天穗日命の天降

り御在ー坐御事と云ふ正書小此及三年尚不報聞と書
これ天稚彦神の事小就て此小經八年無以報命と所
見たる此を以て其程より引續きたる御政ありし御
事を知べし其天稚彦神の事訖て後小經津主神武甕槌
神と天降一遣ハたりふも亦其間有べき事右小准
るへし思ふ可き者あり否ハ時ハ大己貴神を
も大國主神と稱奉りて天下を主領せ御在ー坐ける
其間の甚くも久しき事と天上の事と國土の
事と神典の上小於て彼此乖ける事の多うりけるを
如何ハ爲む是予が此平國の御事と稽ふる規則ハ
然る時世の辨も無して漫ハ神典を

○口訣小自餘之說
 天高皇產靈神皇
 勅而此為天照太神
 之物者於此一書有
 三種禰之空作之
 陰神勅政前後
 以為天照太神勅
 字と云ふ事也
 者
 △龍照近說可王
 者龍照二神生
 天八洲記曰生此洲
 之生而神也
 華明紀照微於六
 合之內下留記
 早送于天上雖然如
 以後無可三於此國
 古是日神之說可王之地者也

説く者如何ハ古義とバ
 得フ其甚怪ハ事あり
 ○天照太神勅天稚彦曰
 ハ正書ハ凡て高皇產靈尊一神ハの係たるを此
 小ハ天照太神ハの係て傳レられたるも實ハ天
 照太神の大命ハて高皇產靈神皇產靈二神の事執行
 ハせ給へりありけりハ右の三柱神の御事小見奉り
 可ク所以傳ル一ニ六丁
 之地也ハ傳ル一五十
 云ハ以為葦原中國之主と有リ同ト事あり即此下小
 因勅皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之
 之地也と有リ相應へ見ル可ク大命ハのハ有リける古

事記ハ此ハ天照太神之命以豐葦原之千秋五百秋
 之水穗國者我御子ハ之所知國言因賜而天降也中
 尔高御產巢日神天照太神之命以中略詔此葦原中國者
 我御子之所知國言依所賜之國也と有リ其御天降段
 小此豐葦原水穗國者汝將知國言依賜故隨命以可天
 降ル所見ル此小可王と云ハ其ハ所知と有リ其所
 知と云ハ深意有リ事あり其ハ傳ル一五百十ハ注
 小繼体天皇二十四年御紀小爰降ル小泊瀬天皇之王
 天下幸承前聖隆平日久欽明天皇十三年御紀小我國
 家之王天下者恒以天地社稷百八十神春夏秋冬祭拜

波夜夫流ハ稜威速夫流の略あり由山云々然
る言めて稜威の迅速を云あり又此語をハ物の
利もハ威嚴威一ハ峻嶮ハ急劇ハ
也云事常あり伊勢物語初ハ昔人の如此一速ハ
風雅をハ爲りる空穂嗟哉院ハ大徳等近侍
ハ加持高も爲り弱ハ其ハ感給
ふ者ハ密ハ讀セ給ふ真言律師一人一速ハ讀
ハ甚尊一蜻蛉日記下上ハ小家の飯ハ打寐ハ
程ハ門一速ハ叩ハ胸潰れて寤ハ又
ハ蟬ハ甚甚茂ハ成ハ俄ハ一速ハ鳴ハ

大和物語ハ小平仲悪ハ思ハ若ハ女ハ妻の許ハ
率ハ來ハ置ハけハ事共ハ云ハ妻終ハ
追出ハけハ一速ハ云ハ近ハ得
源氏抽ハ院の御在ハ坐ハ
つれ後の御心一速ハ傍思ハ詰ハ報セハ思ハ
可ハ源平盛衰記ハ天性入道ハ善事ハ悪
事ハ前後ハ顧ハ一速ハ人ハ心中ハ舞の終ハ
と逢ハ待給ハ拾遺三十九ハ其頂熱
田の神一速ハ御在ハ坐ハ自然堂ハ脱ハ馬の鼻ハ
向け無礼ハ致ハ者ハ即立所ハ討セハ御在ハ坐

△神名の備後國
三縣郡知波夜比
古神社三波郡知波
夜比賣神社神名
有國造事紀
部連祖出雲縣大
臣命五世孫知波夜
命有子何れ
稜威有武一雄
善の三連也

△藤原仲麻呂の
と鎮し時の御軍
の事

ければ云と有る是ふと殊小此の知波夜夫流の近
き者ありけり但此の荒振の邪神の如き有り
善神の上も云事あり強り小殘賊強暴の字の如
云の云も非れ其心して見り可きあり稜威の
義ハ傳十五卷百三十五丁云云波夜の事ハ廿一卷
九百八十二丁牟人の條云云今云限ハ非りあり
伊勢物語の物知波夜伎ハ早速あり卒小歌を
書て遣り卒小返事あり云勝れて速かりあり心
ありと有り和訓栞小詩ハ捷々を伊知波夜志と訓り
伊勢物語ハ伊知波夜伎と云も此類あり唯轉りて
聽心小用ひたりと云れ又續紀第廿二詔ハ如此
久宇治方夜伎時ハ有と遊仙窟ハ嗟運命之逆遭歎
郷關之助逆と有と耽遊ハ對ハる逆遭ハ宇知波夜
伎事哀と訓注ハ周易曰逆如遭如乘馬如王弼曰
逆難之時正道未行與初相近而不相得困於侵害故逆
遭逆時方逆難正道未通涉遠而行難可逆進云と云
石の例共 儲此知波夜備夫流ハ神の人も人とも
同意あり

△玉梓之使母不許
十六丁小體病吾身
二層十層破神ハ元
莫員ト部座龜毛
莫燒會

續けり共小善クハ神惡ク人々云捌り万葉二
十二丁玉葛實不成樹尔波十磐破神曾著常云不成樹
別ハ二十丁五十丁小知波夜夫流神并許等年氣麻都呂倍
奴比等辛母夜波之波吉伎欲米都可倍麻都里三二三
丁小十磐破人乎和爲跡不奉仕國乎治等 一云掃と有
るは是あり又其より轉りてハ何と無く唯小神と云
ふ發語ハ常用ふる事ハ三丁四十丁小十磐破神之社四
無有世代春日之野邊粟種益乎四丁二十丁小十磐破神之
社ハ我掛師幣者將賜妹不相國十一丁七丁小十早振神持
在命誰爲長欲爲又八丁二十丁夜並而君子來座跡十石破神

社乎不祈日者無又二十吾妹兒又毛相等十羽八振神
社乎不禱日者無又九丁千葉破神之伊垣毛可越今者吾名
之惜無十七四十知波夜夫流神社尔底流鏡之都尔
等里蘇倍二十三十五丁知波夜布留賀美乃美佐賀尔怒
佐麻都里伊波負伊能知波意毛知我多米あじ見元
たらし善神の御上小云事めて上件あるとハ表裏ふ
るが如し故思ふ小此小謂ゆる殘賊強暴横惡之神の
如くハ邪神雖も甚一速びて可畏者ありけれ
ハ其凶惡の義を取ずりて凡て神御校威を可畏奉る義
ふ取て發語と爲るあれ強小非事とハ云はり

者あめり古今集序小千早振神代ハ歌の文字
も定らざる秋下小千早振神代も聞龍田川唐
紅小水括りハ賀小千早振神の功けハ衝りハ千
年あとの歌ハ多ク賀茂の坂も越ぬべし戀あとの歌ハ多ク賀茂十小千早振神社の本綿
禱一日も君を懸ぬ日ハ無一あじ猶多一但此歌賀茂
社を顕昭本より神社と作り又万葉七二十丁小千般石破
金之三崎乎過鞠吾者不忘杜鹿之須賣神と有ハ神を
略きて加の一言小係りハ古の十早振賀茂社と
續けハ更あり金葉小十早振君と係りハ無一東歌ハ十早振ハ賀茂社ハ御校威ハ多ク賀茂搥日宮の秋葉と二
度搥頭す我君が君新古今小千早振搥日宮の綾秋

ハ神の御衣木小立りありけり二有也同ト例ありハ
早振と神と續けり同ト意小見り可一又仁徳天皇
前御紀小知破椰臂苦于知旒能和多利珥と云事二所
小在と古事記小明宮段小收一ハ知波夜夫流一
ハ知波夜比登と出たり万葉七十一小千早人氏川浪
乎十一ハ小千早人宇治度十三五小血速舊于遲乃渡
或本歌云物又七千速振氏渡乃古今雜上小千早振
部之氏川渡又七千速振氏渡乃古今雜上小千早振
宇治の橋守汝と一が衰れとハ思ふ年の經ぬれば
と所見たり釋紀小知破椰臂苦師說強力武猛又也言
強壯最崎嶇也と注り此通證小蓋以イナハル嚴忌振人之氏連

屬之猶物部之氏河物部之八十氏河と注り此ハ共
小然也言あり但宇遲と云意ハ以異あり可一冠辞考
小称徳天皇御紀詔小宇治方夜伎時と有ハ一速と世
と云小同ト以人心の甚悪くムド交利と時と云ふ邪神凶
徒と知波夜夫流と云ハ思ふ小物部ハ猛けれ
ハ知波夜夫流人てふも物部の宇治てふも同ト意ハ
とを曉り可一取と云れたるが宜一然ハ頭昭密
ハ古くハ神と注せり或ハ神具ハ禪ハ物有
ハ其知波夜と著ハ神と振と千早と振ハ滿比ハ
ハ可一或ハ千磐破と云と神の力の強ハ千ハ
磐石と破ると云義あり云と云ハ古人ハ似合
とハ有ハ知と伊と片假字の相似らるハ訓伊波夜夫流
とハ有ハ知と伊と片假字の相似らるハ訓伊波夜夫流

延佳説ハ稜威速振之義ト云ヒ或説ハ氣速振ありと
も云れどハ共ハ信ハ難ハ一儲此字ハ通證ハ孟子曰賊
仁者謂之賊賊義者謂之殘殘賊之人謂之一夫類書纂
要曰強暴強剛強也暴卒遠無漸也ト有カ如ハ但其字
ハ然ハ事ハありト語ハ本ハ稜威速振ハ善ハありト惡
ハ成ハれト○横惡之神者ハ私記ハ與古之万奈留安之
者ハありト岐加美ト訓ハ通本ハ阿志伎迦微ト訓ハれト古事
記ハハ此ト道速振荒振國神等ト見元天若日子段ハ
ハ其國之荒振神等ト有ハ據ハ荒振流神等ト訓ハべト
あり即傳卅一ト注ハセト正書ハ多有螢火光神乃
蠅ハ色邪神復有草木威能言語ト有ハ其ト括ハりト邪鬼
書ハれト又ハ其下ト七百九ト謂ハれト邪神及草木石類ト有ハふ

遷却崇神詞ハ
荒振神等ハ神撰
給ハ神和ハ給ハ

△常陸風土記ハ昔
美麻貴天皇ハ取宇
之世ハ爲ハ平ハ野ハ荒
之荒賊ハ有ハ乎ト
俗曰河良夫流奈斯
母ハ有ハ乎ト見ハ今ハ年ト

どハ一ハ小總ハ云ハりトあり上章第六ハ一書ハ夫葦原中國
者本自荒芒至及磐石草木威能強暴ハ見元大祓詞ハ
國中ハ荒振神等ハ神問ハ志ハ賜神掃ハ賜ハ此ハ語問ハ志
般石根樹立草之垣葉ハ語止ハ出雲神賀詞ハ豊葦原ハ乃
水穗國ハ波畫ハ波ハ如五月蠅水沸ハ夜ハ波ハ如火窟光神在利
石根木立青水沫ハ事問ハ天荒國在利ハ云ハ荒ハ留神等ハ乎
撥平ハ氣ハ云ハ常陸風土記ハ和平山河荒梗之類ハありト有
ハ皆此時ハ御事ハ云ハりト又古事記白檮原官段ハ言
向平和荒夫琉神等退撥不伏之人等崇神天皇十二年
御紀ハ綏荒俗舉兵以討不服景行天皇四十年御紀ハ

今東國不安暴神多起アラハルカミと見え其時の詔ミコトノコト即巧言調暴
神振武以攘姦鬼ニと宣ノリ又聞近江膳吹山有荒神アハルカミあり
有り古事記同段コト天皇亦頻詔倭建命言向和平東
方十二道之荒夫流神及摩都樓波奴人等而ニ見元幸
于東國悉言向和平山河荒神及不伏人等ト也悉言向
荒夫琉蝦夷等亦平和山河荒神等ト見元（喪荒弁）令集解コト載
古記小景行天皇の崩坐一時コト七日七夜不奉御食
依此阿良備多麻比岐ニ見元大殿祭詞別コト神等能伊
須呂許比阿礼比坐（并）言直志和志坐成遷却崇神詞コト
天御舍之内（仁）坐須皇神等波荒備給比健備給比崇給

事無志あり有ハ神ハ御崇（志）云ハ御門祭詞（志）四方
四角利與利踈備荒備來武天能麻成都比登云神（志）言武惡
事云道饗祭詞（志）根國底國（志）與鹿備踈備來物（志）云
と有（志）是等（志）惡神（志）散（志）け放（志）り踈（志）く為（志）居（志）て
其間隙（志）を伺（志）謂（志）あり大祓詞後釋（志）此（志）荒振神（志）云
八（志）凡（志）天神（志）順（志）方（志）依來（志）ず（志）踈（志）く（志）神（志）と廣（志）く
云（志）備（志）依來（志）ず（志）踈（志）く（志）荒振（志）と云（志）例（志）万葉
二（志）八（志）丁（志）小島宮上（志）池放鳥荒備（志）勿行君不座（志）十方又御立
為之島之荒磯（志）并（志）今見者不生荒備（志）勿行年替左右（志）四（志）
五（志）小筑紫（志）船末毛不來者豫荒振（志）公（志）見之悲左（志）十一（志）
丁（志）十二（志）

八小妹之髮上小竹葉野之放駒蕩去家良思不合思者
 又四丁 栲領巾乃白濱浪乃不肯荒振妹尔戀乍曾居古
 今集山也故郷小非ぬ物補 我爲小入心意の荒見
 元ハ疎アラクアエサニハ荒振と云ハ常あると其疎補ハ然ハ言ハて其
 就行ハ暴惡ある事小歸る事ハ止ある知波夜
 夫流也元ハ稜威の迅速事あると其より殘賊強暴
 書ハ字義小轉移れと同下例ハて各其本末有る
 事小有る有ける私記ハ與古之万奈留安之岐加美と
 壺十丁ハ人の偏執深強積り安雖此例無訓ハ非源氏成添

明石五丁小横狀多ハ今何の報終ハ如此成侍ハ
 溺れ給ハ又サニ丁制ハ横狀罪ハ當りて思孫
 程横狀雨甚冷ヤ吹入若菜上九十二丁小横狀
 小甚目と見漂ハ非ぬ方小及と横狀ハ云り
 故汝先往平之ハ正書小即以天穗日命往平之と有
 傳廿一九丁注セリ○天鹿兒弓及天真鹿兒矢ハ
 正書小ハ天鹿兒弓及天羽二矢と見え古事記ハ天
 之麻迦古弓天之波二矢と有例ハて此ハ天真
 鹿兒弓と云バ又此天真鹿兒矢と天羽二矢と
 云バ其説傳廿一百三十丁注セリ

○日持書傳三十二

口説多娶國神
女子者詭言
にあり但多娶國神
のいふに非ず國神
神と云ふ人か爲り
有る爲なり

○受勅來歸降ハ四神出生章第十一書小受勅而降
と有る同ト傳十四三十三見ベ一○多娶國神女子ハ正
書ハ即頭國玉之女子下照姬亦名高姬亦
名稚國玉見元古
事記ハ即娶大國主神之女下照比賣也有る其ハ正
ト嫡妻也と此傳の如クハ其餘ハ多小國神の
女子を取アリて妾也ト爲り可ハ是其國を豫て
獲て思ふ心有る故小國神ハ多く親昵を成むと
の方便の在つるゆゑ也○經八年無以報命ハ私記
ハ也止世尔奈留万互反事申古止奈之と有り古事記
ハ也至于八年不復奏と有る其傳同ト事あり

カレ アニ ララス 有ふミカミ スナハク ノミテ カモヒ カネノカミヲトヒニテ
故天照太神乃召思兼神問
リノマモ マザル サマシ トキニのサモヒカネノカミ カモヒ テ
其不來之狀時思兼神思而
マコサウロバニトマタ ツカハシテ キミシラ イハシラ イハシキロ マハ ニ シヤウ
告曰宜且遣雉問之於是從
カノカミノタカハシニ スナハクツカハシテ キミシラ ユキテ ミシノタマヒキノカレリノキミニ
彼神謀乃使雉往候之其雉
トビ タダリテノサテ アノ ワカ ヒコカカドノマハルロ ユ ツ
飛下居于天稚彦門前湯津

杜樹之杪而鳴之曰天稚彦
何故八年之間未有復命時
有國神號天探女見其雉曰
鳴聲惡鳥在此樹上可射之
天稚彦乃取天神所賜天鹿

兒弓天真鹿兒矢便射之則
矢達雉胸遂至天神所處時
天神見其矢曰此昔我賜天
稚彦之矢也今何故來乃取
矢咒之曰若以惡心射者則

天稚彦必當遭害若以平心
 射者則當無恙因還投也即
 其矢落下中于天稚彦之高
 胸因以立死此世人所謂返
 矢可畏也緣也

凡て此天稚彦と降らせ給へる事正書の狀に大奇殊
 異ある事無くと雖も傳ふ趣ハ專古事記亦等同
 りけり傳廿一六十九注九如く此時の大御政
 も天般石窟の時、較略の如く思兼神も謀主ハ渡
 りせ給へるを此ハ一所出たる事ハ足ぬ事ハ
 が凡てハ係し心得る甚美だ、あとも云へば更
 あり然るハ右ハ謂ゆる殘賊強暴横惡之神ハ、彼
 根國底國より疎び荒び來物ハ、在ければ其を討平
 り事必其黄泉國の穢惡と深く忌嫌ハせ給ふ火産靈
 神の御族の神等、稜威ハ依ずりて、得有る所

以有^が故^の其^の思兼神と以て謀^るを御在^り坐^しけり
て其天稚彦の如きも本^{より}天神の御選^り小^の擢^りれ奉^る
る程の神小^の在^れど也彼殘賊強暴横惡之神小^の相率^り
こり相口會^すり^し天神の御爲^り小^の疎^び荒^ぶる所業
共有^りれ^ば其神の國土小^の降^りて忠誠あ^らる由
とも明^るめ^りせ御在^り坐^しず^ば得^べる^べり^しあり
此を以て此小^の其神と召^させ御在^り坐^して其行^はせ給^ふ
は^じ御政^を令^し奏^給へ^り事此^の古事記の傳^る其正
實と^り得^なり^けり但^し其記^の初^に天穗日命と^り巡^察と^り使^は
爲^り降^りる^所也此天稚彦^を降^りる^所也次^に
征伐使と爲

小^の稚彦^を斥^は候^と爲^り降^りる^所也終^に武甕槌神と
將軍^と爲^り降^りる^所也皆^に此思兼神の思慮^を仕
奉^るれ^ば由^り有^り甚^く心行^くと此小^の唯一^の所^に其神の
御名^を出^しる^所也^の傳^り異^なる^所也思^はば
然^らず此^の及^ばず^ば始終^を此神の謀^る事^を
聞^せる^者も可^き事^は是^に從^ひ彼神謀^と云^ふ文^の縁
あ^らる^を以^て曉^ら可^き者^{あり}然^らば此^の一^の書^に
事^を皆^く略^りれ^た故^に初^に思兼神の御事^を
バ云^ふ出^べくも非^ず又^し上^に天照太神勅^り天稚彦^に有^り
首^を從^ひ思兼神謀^と言^ふ出^しる^所也故^に此^の
置^れたる^所也^の經^津主^神武甕槌神と降^りる^所
從^ひ彼神謀^と置^れたる^所也^の是^に○思兼神纂^り疏^る思兼

神思慮兼入故天照太神詢問此神獻策也注給
 へり此神の御事已傳十九百八十一二十三十一廿二十五
下委し注し置り○問其不來之狀古事記天
 若日子久不復奏又遣曷神以問天若日子之淹留所由
 と有り所不當れり不來を社記小万宇古左留有り
 事あり也宇ハ音便あり麻章と訓へ神武天皇已
 末年御紀並特其勇力不肯來庭仲哀天皇八年御紀
 小有明心以參來右等ハ其來不來を以て順
仁德天皇十年御紀歌小耶鉢波與健須企以利麻草區例
 不順を別云古書の文法あり万葉四四十一道之
 間并煩參來而十六三十一東中門由參納來互命受例

婆十九三十一參來之印毛有香二十十一伊夜麻之
 尔安礼婆麻為許牟あど何れ麻宇ハ云よりあり
 古事記の淹留其遺ハ國エ在り事久し
 由と宣ひ此あり不來ハ其自還參來天上上來
い事と宣ひて云
 狀ハク別有り
 ○思而告曰ハ寶鏡開始章第一一
 書ハ思兼神云者有思慮之智乃思而白曰有依て
 心得べ傳二十四十一云り○雉の事ハ正書無名雉
 の下云り傳卅一百七十見べ一○從彼神謀ハ古語
 拾遺石室段爰思兼神深思遠慮議曰中於是從思兼
 神議有意同一○候之ハ正書同之有小同一
 私記ハ候之の下令見令伺と注せれたる小金澤

本小美世志年又宇迦賀波志年と云ふ二訓有ハ其小
據れる者と有ガ此ハ宇迦賀波志米給布と訓べ一傳
廿一百八十丁小注せる如く此ハ間諜者ウカヒヒトありバあり古
事記大氣都比賣段小立伺其能と見え御紀小ハ瑞珠
盟約章小敢窺竊此處平皇極天皇御紀二年小伺候大
臣渡橋之時争陳神語入微之說其三年小闕關社稜ウカフ
見元出雲風土記出雲郡宇賀郷略中尔時女神不肯逃隱
之時大神伺求給所是郷故云宇賀もど所見たり傍ハ
潛居其間隙一ウ穿見義と見ゆ窺竊の字ありと爲
小當て訓るも隱謀と爲君位と潛小頭けじと爲
事己傳十五卷九十丁小云り○其雉飛下居于天

稚彦門前湯津杜樹之杵ハ正書小其雉飛降止於天稚
彦門前所植植此云湯津杜木之杵杜木此云有小同
ト傳廿一百八十丁小委一注せり○鳴之曰神武天皇
戊午年御紀小皇師大率將攻磯城彦中更遣頭八咫鳥
召之時鳥到其營而鳴之曰天神子召汝怡婁過ハ
兄磯城念之曰聞天壓神至而吾爲愜憤時奈何鳥之若
此惡鳴耶略下と有り狀小彷彿たり此鳴之曰ハ鳥の語
ありハ故小此ありハも頭八咫鳥ハも鳴トハ云ハ此
實ハ人語ト以て傳たり者あり己小傳廿一百九
丁小注りハ如く此所ト古事記小ハ故尔鳴女自天降

到居天推彦之門湯津楓上而國言亦曲如天神之詔命
見九次の天佐具賣開此鳥言
と有り此を以て其人語を成せり事を知べし然れ
鳥りして人語を成せり其掌常非多故次小天
若日子よ云所ハ此鳥者其鳥音甚惡と有り此ハ鳴
之目と云
小同ド ○何故八年之間夫百復命と云ふ此上ハ脱
文有べし古事記ハ其雉ハ詔命負せ給ひける所ハ汝
行問天若日子狀者汝所以使葦原中國者言趣和其國
之荒振神等之者也何至于八年不復奏と有れば天神
の詔命ハ如く宣ひふハ心右の如く云すしてハ言足
ハよりあり上ある汝ハ其介候ハ遣はるる雉と指て
詔へるあり次ある汝ハ天推彦の事あり使葦原中國

ハ彼天真鹿兒弓天真鹿兒矢と賜ひて征伐の御使と
爲し降し遣し給へり御旨と詔給へりあり其國之
荒振神等ハ此ハ謂ゆる殘賊強暴横惡之神是あり言
趣和の言趣ハ記傳十三丁二小万葉廿五丁十小知波夜
夫流神乎許等牟氣と有り言意ハ言ハ事ハて事依事
避ふどの事ハ同ト牟氣ハ牟加世ハて皆ける者を此
方へ令向り言の言あり皆向ハ此此所と後ハ反ハ彼方へ向ハ
ウ平字を書て牟氣とのも云り此向へ向ハ即歸服
ありと云はれり如し猶傳廿一八十一丁小注り事
共を考合可し和ハ記傳十三丁二小夜波世と訓べ

十記中小多く有レ和平と見レ大殿祭詞
 別小神等能伊許呂許比阿礼比坐并言直志和志古語
 志氏迂却崇神詞小荒振神等并神攘二給比神和二
 給氏倭姬命世記小阿佐加乃弥尼并坐而伊豆速留神
 云レ種二大御宇津物彼神進屋波志志豆目平奉止詔
 云レ其神并阿佐加乃山巔社作定而其神并夜波志志
 都糸上奉天勞祀支万葉二三十小千磐破人并和為
 跡二十五十丁山麻都呂倍奴比等并母夜波志と所見
并補と注レた乃が如レ今本小此の何故と耶迹由
意訓をめ給ふ御言と為用べレ八年之間の間字を許
 呂と訓を然くず阿比陀と訓を未有復命の私記

人金澤本小思鳥
 七佐賀那後登理
 と言レ謂レ不祥
 の言レ是なり

小加倍利古止万宇左須と有レ是なり天神の仰言を
 う那拵八年能阿比陀返事奏佐受と訓一可き所あり
 ○時有國神号天探女此神の事傳廿一百九十小己小
 委一く注せれバ今云限小非ず○鳴聲思鳥ハ私記小
 祢奈岐安之岐止利と有リ傳廿一二百小注をが如く
 正書小此雉を指て奇鳥と云らハ鳥少レ人語を成
 を以て怪レと云らと此ハ其鳴色の耳小悖へるが
 故小思鳥とハ云らふレ古事記小尔天佐具賣聞此鳥
 言而語天若日子言此鳥者其鳴音甚惡と有レ同ト趣
 ある所あり此ハ天神の正レ御使りの仰言あり
 心天探女ハ鬼魅の類少レ如何ふ也カ一拵へて

天推彦と忠誠ありける者小成り果して天神との御中
 と離間りて爲り故小己が方様を取て直りけるを
 以て鳴色悪鳥といひ謔言爲つるありけり
此ハ漢小也
和山也古小
 も今も多き事ありて君臣の間を絶り父子の間を疎
和山也古小
 く爲むと爲て謔言を構ふる者世の史共多き在り
 ハ皆天探女の如き邪神奸毒鬼の相交ニ相口會た
相口會た
 りか爲あり天推彦あり諸神の中より壯士と選び
相口會た
 抽れたる神あり有れども終ら其の中
相口會た
 放り神の爲小身を亡ふ事と成れり ○在此樹上ハ
 正書小居杜抄と見えたり小同ト偕此樹上を伎能須
 惠尔又伎能宇幣倍尔と西訓有が右小居于天推彦門
 前湯津杜樹之抄と有る應ふる所ありけり
三下小岸近と辨波木末求麻
 叶ふ可し但許奴礼と訓べしや万葉五十六波

流佐礼婆許奴礼我久利臣六十三小末末尔波幾許毛
 敷和口鳥之色可聞七三十三小三國山木末尔位歴八四十
 丁小山際遠木末乃閑往見者又二十夏山之木末之繁
 尔又三十三木末歴色附尔家里十三二十小樹奴礼我之多
八丁
 尔鷺鳴母又二十足日木山之木末尔十七二十小安之
 比紀乃山能許奴礼尔又三十三之麻末尔波許奴礼波奈
六丁
 左吉十八二十小阿之比奇能夜麻能許奴礼波又三十三
八丁
 安之比奇能夜麻能許奴礼能保與等里天十九十三小
 安之比奇能山之木末毛あり所見たり木末と有と
 も古くハ許奴礼と訓ありけり但和名抄ハ樹梢

唐韻梢所交反和枝梢也所見たう許奴礼ハ伎能字
字と宇礼と訓むハ万葉ニ卷廿二丁ハ子松之宇礼字
と百と其四十三丁ハ子松之末と書セハ是あり
其全余○可射之ハ伊許呂須倍志と訓ハ古事記ハ故
可射殺云進と百と同ト事あり即射殺と云ハ天神
より賜われハ天鹿兒矢天羽ニ矢と齋と持と見て
其弓矢ハ就と云あり云進ハ所由ハ傳三十一百ハ
其記と引て注セハ合セ讀ベハ○乃取天神所賜天
鹿兒弓天真鹿兒矢便射之ハ正書ハ乃取高皇產靈尊
所賜天鹿兒弓天羽ニ矢射雉斃之と有ハ是あり傳三
十一百ハ己ハ注セリ○達雉胸ハ正書ハ洞達雉胸
六丁

古事記ハハ自雉胸通而と有ハ其訓同ト傳卅一
ハ注セリ○遂至天神所處ハ有ハ所處ハ美母登と訓
ハ建坐天安河之河原天照太御神高木神之御所と有
ハ御所と訓と同トリ其由傳卅一二百十ハ委一ハ
ハ就と見ベハ○時天神見其矢曰此昔我賜天稚彥
之矢也ハ正書ハ至高皇產靈尊之座前也時高皇產靈
尊見其矢曰是矢則昔我賜天稚彥矢也と見ハ古事記
ハ故高木神取其矢見者血著其矢羽於是高木神告
之此矢者所賜天若日子之矢即示諸神等詔者云と
有ハ此及矢ハ大御政ハ於ハ專高木神之事執ハ御

〇〇此記小何故來
何乃由來仁政
上乃多乃仁入心有れ
心の中昔の体訓
此取

在―坐す深き所以有る事あり傳卅一 二百十六丁二
小注る事共と合せ考ふ可し〇今何故來ハ今何抄氏
加毛來都良武登詔給比此と訓添べ即正書ハ血深
其矢蓋與國神相戰而然歟と有ら如く其矢の來る所
以と疑ハせ給ふ御詞みて次ハ若以惡心射者云若
以平心射者云と有ら御言を舉りて御在―坐す所
以此小在り〇咒之曰の咒を保岐氏と訓り神武天皇
戊午年御紀ハ嚴咒詛此云怡途能伽辭離と見え其下
ハも譬如水沫而有所咒著也と有ら咒著也伽辭離
都久と訓りり欽明天皇二十三年御紀ハ鳥飼首歌依

依云人誤小遇て死ける所ハ延尉收縛其子守石與
沖瀨水將投火中咒曰非吾手投咒訖欲投火守石之母
請曰投兒火裏天災果臻請付祝入使作神奴乃依母請
許没神奴と有と見ら延尉ハ人ヲ刑あふも祝人
を以て咒カニリを令行り事と聞ゆる其咒字を也伽辭離
と訓り傍小保佐枳と也訓りを以て此小咒之を保岐
氏と訓るハ保佐枳の略ある事を知べ其言義ハ宝
鏡開始章第二一書神祝之の下小傳卅一 百十小注
ハ如く保佐久保其共小善具と也惡トと也通ハ
一云言して其保ハ穂ト出あト云ふ保ト思トの外小

表よりを云ひ佐久の前サキと同ト事めて先小進むを云
 い保具と云時ハ穂ホ舉アツの義あり共小同ト義あり者
 あり然れハ此の伽辞離と云小當べき咒字と保岐氏
 と訓む事ハ天神の天稚彦の事ハ就て不審ト所思
 食すが故小其大御心と向とせ御在ト坐て善くも悪
 しくも其状小随ひて治とせ給ふ御所爲と申す所ハ
 此ハ保岐氏と訓て尤小當れり所ありけり纂疏小咒
 祝字同咒属也謂以善惡之辞相属也天帝無心而咒天
 惡者自惡善者自善蓋自取之然後得其所属也と注と
 せ給へり心を得て考ふ可ト事ありけり
本の傍
 小調伏

伽辞離後
 今由傳九卷二百
 三十三小注にハ
 今云限ハ非

誦と有ハ後人の書入たり者あり直指小咒ハ口中
 小唱へて善惡を祈りたりと云ハ金澤本ハ保岐
 氏と有し理首イ似たり通證ハ重遠曰咒託心也と云
 い集韻咒詛也又願也通作祝書無遠否則歛口詛祝疏
 以言告神詛之祝請神加殃
 謂之詛と有と考合す可ト
 ○惡心私記小岐太奈岐古
 二品と有り瑞珠盟約章小黒心又ハ濁心其第一一書
 小惡心あり有り傳十五 百七ナ 小己小注せり 古事記
 小ハ此と或有邪心者と有て訓意共小同ト由傳卅
 一 二百ニ 小迷たたむか如ト射者ハ伊都流那良婆と
 訓べト○當遭害ハ麻自許礼那牟と訓む事習ひあり
 古事記小ハ此と天若日子於此天麻賀礼云而ト書ト
 此たり即下小即其天落下中于天稚彦之高胸因以立

死に冊有る其の詔ゆる禍あり由傳廿一二百
九丁注せらる如く此の麻自詐許礼那牟ハ傳廿九二百
六十三丁四注らる如く御門祭詞小四方四角利與
百十九丁武荒備來天能麻我郁比登云神乃言武惡事古語
許相麻自許利相口會賜事無久道饗祭詞小根國底國
與鹿備疎備來物小相率相口會事無氏又有邪神の
祀小遭ひて害い事を麻自許利と云あり大
祓詞小謂ゆる盪物と云も人を呪ひ詛小料の物を設
け其小遇字一字を云わ右小同トく又大同類聚
方小災の差別として云中の第五條小母能解者万自

△私記小與岐心
平心有ハ言足字

故俚介太毛乃解多訶可味乃介と有て神氣小厭土ハ
りと云趣あり小也考合可者あり然此ハ麻自
其神氣小被害字と云あり私記小當遭害と末志
古礼奈利と有る利ハ決りて誤字あり可一谷重遠説
小當遭害見厭殺也
と云然可一○平心ハ伎與伎心と訓傳十五
百十注らる如く黒心小對へ赤心と書て濁心
小對へ清心小書れらる此ハ惡心の字小對へて
平心と作れたり者各別意有ハ非りあり古
事記ハ或天若日子不誤命為射惡神之矢之至者不
中天若日子と所見たり其事傳廿一二百注一此
り○當無恙と佐伎久阿良牟と訓金澤本ハ當

无患小作りて右の訓リ外小佐祁久阿良牟と云を傍
 小副たり即古事記小不中天若日子と有は是れ其
 害小遭ふリ由と詔給へりあり佐伎久の事ハ傳
 廿二四百丁 宝鏡開始章第三一書サキクミ當平安カ所小委
 注セリ然ル私記小ハ此當無恙と津ニ加奈計牟
 と有は據有り若然リ時ハ都ニ美と訓ハ一通證小也
 引ハ續紀第五十八詔小罷麻佐牟道波平幸久都
 牟事無久宇志呂毛輕久安久通良世止云と見元万
 葉五三十一丁 小都ニ美無久佐伎久伊麻志互速歸坐勢六
 三丁 小荒浪風ル不今遇ツミナク草管見身疾不有急變賜根本
 六丁

國部ルと有は草ハ莫ノ誤ル莫ツク管見由鈴屋大説ル
 小從小可一十三丁 小言幸真福座跡急無福座者十五
 丁 小大船牟安流美ル伊多之伊麻須君都追牟許等奈
 久波也可饒敵里麻勢二十十九丁 小都ニ麻波受可弊理
 伎麻勢登伊波比倍牟等許弊ル須惠互又三十丁 多比良
 氣久於夜波伊麻佐祁都ニ美奈久都麻波麻多世等又
 六十丁 阿牟宇奈波良加是奈美奈此伎由久左久佐都ニ
 牟許等奈久布祁波ニ夜家無ル有は是ある後小
 ハ都ニ賀那久云事小成ル空穗藏開下十二小 偕
 也人咒ふ久ハ三年小死ルあり大將久の急也有ハ

朝臣の爲ニ思ハシと病と云ふ源氏白宮テ小事觸テ
我身小恙ニ有る心ヲりずる唯ニあらず物ノ歎ニけり
思巡ルつて東屋丁五十ノ小可惜ク惜ニければニ恙ニ無ク
思ふ如見成リと云ふあニ有リ此都ハ年ノ言ハ傳テ
九五百八十九丁小注ルか如ク罪ニと云ヒ其友ト謹ムあニ云ト
同言ハ一ニ佐伎久ハ向ヘ延行カ如キと此ハ此方ハ
迫ル義ニ縮ミ可シ万葉十八三十八丁小波流佐米ハ許母理
都追年等ハ有ル都ハ年ノ言ヲ以テ味ハ公ハ可シ事ハ
此ハ恙ノ字ハ亦ハ雅釋言ハ恙ノ憂也注云今ハ入云無恙謂ル
無恙也ト有リ故ク訣ハ其ハ取テ恙ノ憂也注云
此方ハ有ル獸曰猯ニ恙也黃帝殺ス由之入恙
事ハ抱ハ恙ノ字ハ○還投之トハ私記ハ加倍志須ノ
の意ヲ用ヒしレたリ

病謂之無恙ハ見レ元通證ハ史記ハ先母辛無恙索隱ハ
雅曰恙ノ憂也風俗通曰恙ノ病也易傳曰上古ノ時ハ草居露
宿ニ恙ノ蠶也善食ハ人心ハ俗ノ恙ノ患之故ハ相勞云無恙ノ注云
れ後漢馬援傳ハ恙ノ春ノ鄉無恙ト有リ此ハ其噬虫ノ
事ハ抱ハ恙ノ字ハ○還投之トハ私記ハ加倍志須ノ
の意ヲ用ヒしレたリ津ニ有ル還志須ハ多麻比伎ト訓ベ正書ハ還投
下之と有ル也ト那宜と正ト訓ベ所ト思ハければ
此ハ其准ルひハ那宜還志給比伎ト訓ベ事傳卅一
二百三ノ小注ルか如ク○即其矢落下中ハ天稚彦之高胸
ハ正書ハ其矢落下則中ハ天稚彦之胸上于時ハ天稚彦新
嘗休臥之時也ト有ル方殊ハ委ハければ其所ハ就テ
傳卅一二百三十八丁小其新嘗以下ハ説ヲ成シ置リ○因

○日本書紀傳三十二

○三十一

以立死ハ正書カハ中矢立死ト有リ○返矢可畏之縁也
也ノ説ハ傳卅一二百四ノ古今ノ事迹ハ微一注セリ

時天稚彦之妻子從天降來

將柩上去而於天作喪屋殯

哭之先是天稚彦與味耜高

彥根神友善故味耜高彥根

神登天吊喪大臨焉時此神

形貌自與天稚彦恰然相似

故天稚彦妻子等見而喜之

曰吾君猶在則攀持衣帶不

可排離時味耜高彥根神忿

日朋友喪亡故吾即來弔如
イニツラクトモ ガキノ ヲセ タル ユエニ アレ スナハナ キ トブラフのイカ
 何誤死人於我耶乃拔十握
ニツ アヤミテト ミニ ビト ヲ ウレニ ノリタニテの スナハナ ヌヌテ ト ッカ
 斂斫倒喪屋其屋墮而成山
ウレギの フリ タフシキ モ ヤサのアルソ ヤ ガナ テ ナレル ヤマの
 此則美濃國喪山是也世人
コレ スナハナ ミ ノ クニノ モアト イフヤニ コレ ナリ。ヨ セト
 惡以死者誤已此其緣也時
イム ヲ マカレル ヒト アヤミツラカシニ。コレ リノ マトノモトナリ。コトニ

味耜高彥根神光儀花艷映
アゲ スキ タカ ヒコ ヒノ カミノ スガ タ ウルハシク ミニア テアヤシ
 于二丘二谷之間故喪會者
マタ ヲ アタ ニ ノ アヒタニの カレ モミ ッド ハル カシタチ
 歌之曰或云味耜高彥根神
ウタヨミ ミテ イハクノアルハ イフ アゲ スキ タカ ヒコ ヒノ カミ
 之妹下照媛欲令衆人知映
ノ イロモロ シタ テル ヒメ オモヒテ シノムト ツトバル ヒトニ シラ チリサヤ
 丘谷者是味耜高彥根神故
ツカ タニ、ハ。コレ アナ スキ タカ ヒコ ヒノ カミヤルハのアル

歌之ウタヨミ曰シテ阿妹イハクノ奈屢ア夜メ乙ナ登多ル
奈婆多ナ迺バ汗奈タ餓勢ノ屢多ハ磨タ
迺ナ彌素磨屢ミ迺ス阿奈院磨波コ
夜彌多爾輔ヤ拖和ミ羅須タ阿ワ
泥素企多伽ネ避顧ス彌キ又タ歌之ウタ
彌ミ又タ歌之ウタ

曰阿磨佐箇屢イハクノ避奈菟マ謎迺ガ
以和多羅素西渡イ以嗣箇播ハ
箇拖輔智箇拖カ輔智爾阿彌タ
播利和拖ハ嗣妹盧豫リ嗣爾豫ワ
嗣豫利據シ彌以ヨ箇播箇拖リ
彌以コ箇播箇拖リ
彌以コ箇播箇拖リ
彌以コ箇播箇拖リ
彌以コ箇播箇拖リ
彌以コ箇播箇拖リ

輔智此兩首歌辭今號夷曲

此ハ大凡古事記の傳と一ありけり如何して其
天稚彦神の殯斂の事ハ於てハ猶其柩の事ハ天上小將
上り去て其喪事を行へり趣ありけり慨たけり
思ふ此ハ正書ハ天上小於て殯斂せられたる狀の
傳の有りけり其小合せて文を改られたる者ハ有べ
く其委し証共ハ己小傳卅一二百九小注り
猶此小ハ履ウトトケり事ハ有けれ此時の歌
小阿妹奈屢夜し登多奈婆多迺と有り是あり此事ハ

就て記傳十五六十小天若日子の喪を此記ハ此國
よての事と書紀ハ天上よての事と爲り何れを
宜と定む可し非れども此歌ハ如此有と以思へば
此記の説當り若天上よて誅ゆハ天在やとハ断
るトトケハありと云れは實然と言あり又次
歌ハ阿磨佐箇屢避奈菟謎迺と有ハ下照姬命のハ
非じ喪會者の歌あり由傳卅一三百七小注り如
其喪會者と云ハ天上より降來り天稚彦神の故の妻子
あどめて其下照姬命とハヒツノ鄙女ハ云あり是將其
喪事の此國ハ在証と成べりける事共あり

けねば天上めて行ふと云はば前後打合さるる似たり
多し如何ハ爲じ其殞敵の地ハ正ノ飛彈國
ハ荒城郡荒城郷有る其地あり事種
ニ百九十五丁ハ注しハ就て見り可し諸此の二歌の
上ハ就て辨有り右ハ故喪會者歌之曰或云味耜高彥
根神之妹下照媛欲令衆人知映丘谷者是味耜高彥根
神故歌之曰阿妹奈屢夜乙登多奈婆多迺云々又歌之
曰阿磨佐箇屢避奈菟詛迺云々と有る官本ハ據り小
右の或云々ハ故歌之曰三十三字を小字ハ作れ
り由るるが其ハ阿妹奈屢夜ハ續きて其歌共ハ凡
て八十二字ハ此ハ一傳ハ故喪會者歌之曰

云ハ次あり阿磨佐箇屢の歌ハ係りある事ハ古事
記ハ據て其下照姫命を書入る共ハ一書ハ細書あり
程ハ續け書しれ其歌ハ無きハ此ハ二歌の間ハ又
歌之曰ハ四字を加へるなるありと思ゆ然れ
ハ此一書ハ悉く大字と成れる今と以心得あり其
宮本ハ據て故喪會者歌之曰或云味耜高彥根神之妹
妹奈屢阿磨佐箇屢避奈菟詛迺云々と有る下照媛云ハ故歌之曰阿
ハ下照姫命の御兄味耜高彥根神あり事を顯し給へ
り歌あり一ハ其喪會者の詠て其味耜高彥根神又下
照姫命等の去給ふを呼止め申す歌と見らふ二首ハ

卅一三百見可一纂疏也柩者在棺之柩也と注
 せ給へり備柩字と加婆柩と訓其屍と柩の中の
 藏めたりを以云柩者あり
柩字と口訣本の柩
小作り金澤本の柩
小作りの共小誤あり小雅の有屍謂之柩空棺謂之
櫬と云ひ礼記小在牀曰尸在棺曰柩とも有なりあり
 ○於天作喪屋ハ正書小舉尸致天便造喪屋と有同
 卜事小ハ有れども從天降來と云所詮無か如
 然ハ百事記小云聞而降來哭悲乃於其處作喪屋
 而云ハ有か如天稚彦ハ死たる所ハ降來て即其
 處小於喪屋を構りて殯斂する趣ありたりハ相應
 小可りりけれ其喪屋の事ハ傳卅一三百十小注せり

○殯哭之ハ母賀理志那久と訓其殯と云正書小
 即以川鴈爲持頭者及持帚者
一云以雞爲持頭者
者以川鴈爲持帚者
 又以雀爲春女一云乃以川鴈爲持頭者亦爲持帚者
以鷄爲造綿者以鷄爲
以雀爲春女以鷄爲哭者
哭人者凡以衆鳥爲事
 而八日八夜啼哭悲歌と見元古
 事記小河鴈爲岐佐理持鷄爲掃持翠鳥爲御食人雀爲
 確女雉爲哭女如此行定而日八日夜八夜以遊也とも
 所見たり是と云あり傳卅一三百十小上代の殯礼と
 委曲小説たりハ其小就て明く可一○先ハ是天稚彦
 興味高彦根神友善ハ正書小先ハ是天稚彦在於葦原
 中國也興味高彦根神友善と所見たり此味高彦

根神の友善しく御在り坐り所以ハ其神の妹下照姬
命ハ天稚彦神の妻と成り又其天稚彦神の同胞也
天津羽二神ハ其神の後と成り也御在り坐り爲る
事傳卅一三百七 小注一又其友善と云ふ言義ハ其下
三百八 小注せりと○登天弔喪の事ハ正書ふも昇天
十一丁 予喪と有と傳卅一三百八 小注るが如く御紀ハ其
殯斂の事と天上しての事と爲りたるが故ハ如此
有る事あれども實ハ古事記ハ此時阿遲志貴高日
子根神到而弔天若日子之喪時自天降到天若日子之
父亦其妻云々と有る如く國土に在り事ある由己

翰

小條ハ小辨へたるが如く○大臨焉ハ大尔美那伎須
と訓ハ金澤本ハ大尔美祢須と訓ハ即傳卅一三百
二丁三百 小注るが如く御紀の中ハ擧哀とも奉哀と
五十三丁 小注るが如く御紀の中ハ擧哀とも奉哀と
も發哀とも哀哭とも書れたる其を美祢多氏麻都流
と訓ハ是ハ當りて君上ハ更にも申さず親戚朋友ハ
どの喪ハ到りて悲哀の色を立て啼泣する事を云ハ
る有ける然れハ美那伎須ハ谷重遠説ハ臨者親見哭
之也と云るハ然り事あり
口訣ハ大臨者帥諸徒
昇天也と有ハ大非
あり通證ハ左傳國人大臨杜注臨哭也文選沈休文安
陸昭王碑文男女老幼大臨街衢接響傳也翰曰臨俯屍
哭也と注一前漢高帝紀注ハ師曰衆哭曰臨と云ハ
白井宗因も張士然表臨哭其喪と云レバ口訣の説當

○形貌ハ正書ハ容貌ト作ルナリ ○恰然ト本共
小恰然ト作り私記小恰然ト書テ非止之久ト泣一纂
疏本及釋ハ恰然ト有ハ從ヒテ今改メフ然ハ諸本ハ
字ハ恰然ト作ルナリ訓ハ何れモ同トモ以テ其誤
あり事著クハあり通證ハ恰訓阿多加毛當哉也増
韻恰適當之辞ト注ルナリ然モ訓フ可クあり其ハ
傳十九四百九小注ルガ如ク古語恰遺ハ吾之所捧室
鏡明麗恰如汝命ト見え万葉十九二十ハ吾勢故我捧
而持流保室我之婆安多可毛似加青蓋ト訓ク名義抄
小恰ト用心也勤也ト注ル其訓ハ阿多加毛又祢牟

甚呂ト見え遊仙窟ハ恰當也ト注ル又名義抄ハ宛字
小阿多加毛ハ訓モ有ルハ然訓モ悪クハ口
小恰然ハ作りテ此登志久ト訓ハ宜ク然ハ恰也
也ト注ルハ當ルガ金澤本ハ恰然ト誤リテ此ハ其
訓ハ異 ○相似ハ正書ハ正類天雅彦之平坐之儀ト有
小等ト事傳廿一三百八小注ルガ如ク御紀ハ似字
ト能礼理トモ多字婆礼理トモ訓モ事ハ在ル也
正トハ右の類字ト同トト迹多理ト訓ヒガ古言ハ
ト○天雅彦妻子等見而喜之曰ハ正書ハ故天雅彦親
屬妻子皆謂云々且喜日働ト有ガ如ク死タル人ハ相
似タル人の現ハ在ル故ハ惑ハツルモ其ト見テ喜

宜しうけり其事ハ傳卅一四百十小妾九丁一辨九丁
ガ如一〇美濃國喪山是也ハ正書今在美濃國藍見
川之上喪山是也と見え古事記也其如くして此者在
美濃國藍見河之河上喪山之者也と有り其喪山の所
在ハ傳卅一四百二小注されバ今云限非ズ〇世人
惡以死者誤已此其縁也ハ死者を以て其已誤たる
を惡むと云義あり正書ハ世人惡以生誤死此其
縁也と有ハ生たる已と以て死たる人見誤たる
こと忘じ由めて我似るも彼似するも云と
の異ころハ有けれ其旨趣於て別有非ず傳卅一

四百二見り可一〇光儀ハ私記非加利與曾本比又
十五丁見り可一〇光儀ハ私記非加利與曾本比又
天流と訓通本ハ氏理金澤本ハ與曾比と有
定了了故傍例を求り崇神天皇十年御紀小仰欲
觀美麗之威儀允恭天皇八年御紀小欲視陛下之威儀
雄略天皇御紀元年小臣觀女子行步容儀能似天皇其
四年小面貌容儀相似天皇も有り万葉も多く光
儀又容儀の字と須賀多と訓ハ更あり古今集序小
下照姫ハ天若御子の妻あり兄人の神の形兵谷小
映り光やくと詠ら云と有ハ依時ハ須賀多と
訓ハ當りけり其須賀多と云ハ生質ハ任小

遊仙宮に小若得
見其光儀と有
諸與曾保比訓

して少々も繕^取る事無く唯有の任あるを云ふ但金
澤本小與曾比と訓るも面白^一然^一此歌小依^考
り小御装束の玉の映ける由ある然^一物めて海宮
遊行章第五一書豊玉姫命の御歌小阿軻娜磨迺比訶
利播阿利登比鄧播伊珮耐企弭我譽贈比志多輔妬句
阿利計利と有も其夫神の威儀と詠奉^一給へり
り天武天皇八年御紀の勅制僧尼等威儀及法服之色
と有も其装束と云あり佛足石歌小己乃美阿止牟麻
婆利麻都礼婆阿止奴志乃多麻乃與曾保比於母保由
留加母と有り玉の與曾保比ハ其装束と云ありけ

此ハ其高彦根神の御并束の麗美^{味相}と云と見
べ一但須賀多と云時ハ其形ハ光有^外映^事
成れり^と與曾比と云時ハ其装束の美麗^映
事と成りて大^違有^如と雖も如何ある麗美
玉を以て外と装束たるゆも其身体より韻出り
光の無^一とハ二丘二谷と争^てハ照^せ給^も然
れハ右の古今序小形ハ丘谷小映^りて光やくと云義
小心得べりハ本^一の事あるふ^一但右の私記の
比ハ非加利と與曾本比とハ本^一別^一非加利與曾本
比^一可^一次^一有^一光儀花艶^一續^一比^一如^一理^一宇^一流
波斯久と訓て四神出生章小日神の御事を光華明彩
と有も同ト心得べり可^一又^一理^一宇^一流^一波斯^一久

△畢輝歌輝花
艶無人及

と續けるハ其書一書ハ日月神等と是實性明麗々
有と同トクハ可けれハ何れの訓とも捨ばらハ非ガ
此字ハ通證ハ范雲詩 ○花艶ハ私記ハ宇留波之久之
賦ニ阻光儀と有り ○花艶ハ私記ハ宇留波之久之
皇と有り允恭天皇七年御紀ハ弟姫の御事ハ容姿絶
妙無比其艶色徹衣而晃之是以時人号曰衣通郎姫也
とも有り纂疏ハ光儀花艶威儀之光華也と注ラセ給
ヘリ ○二丘二谷ハ上章ハ八岐大蛇。事と蔓延ハ丘
ハ谷之間と有ガ如ク其所在の山と以テ大凡ハ量れ
カ古法あるガ中ハ殊ハ此ハ歌。弥多ハ輔施和施羅
須と云ふ句ハ依テ文と成セらあり次ハ十見合す可
○映字ハ次ある共ハ氏理迦賀夜久と訓ハ金澤本ハ

△雄略天皇九年
御紀ハ詔リ視表
者ハ類リて其親
戚ハ喪事ハ類リ
限ハ人ト云ハ事ニ
更ハリ

ハ唯ハ迦賀夜久と訓リ歌ハ阿奈陀磨波夜と有ハ波
夜の言ハ當ルリ所以ハ度會延佳説ハ氏理賀夜久と
訓トなるハ然も有ヘケルハ波延和多流と訓ベハ歌
詞ハ波夜と有ハ映字ハ義を令知ラる者ありと云リ
○喪會者ハ母尔都度閉流比登と訓ラ比登と訓改テ
迦美多知と訓ベハ即古ハ時天稚彦之妻子從天降來
ト有テ作喪屋殯哭之と所見なるハ相照シテ心得ル
ハ違ハ事非トリハ若テ其喪會者の歌と云ハ次ある
阿磨佐箇屢の歌ある事右 三ナハ辨ハらるト見て知
ハハ ○或云ハ金澤本ハ或之ハ作り良海本ハハ一

書云と有り然り時ハ此下照姬命の歌ハ此傳ハ無
 て古事記より取て此ハ收りたなりも有べし○下
 照媛正書ハ媛字姫ハ作なり此神の事傳卅一百四ハ注せ
 り○衆人と都度閑流比登と訓ハ石ハ謂ゆる會喪者
 小て天稚彦神の父天津國玉神及其妻子等の事を云
 あり○映丘谷ハ右の映于二丘二谷之間と有り是ハ
 古今序ハ下照姫ハ天若御子の妻ありセウト兄人の神の形
 丘谷ハ映りて光やくと詠り云々と云ひ此を取て夫
 木集ハ丘谷ハ形映り神代より傳へて久し大和言
 の葉あども詠り○阿妹奈屢夜ハ古事記ハ阿米那流

夜と有り釋ハ在天也と注せり記傳十三六十ハ天在アミ
 小て夜ハ助辭あり万葉三四十ハ天有左佐羅之小野六丁
 之七二十ハ天在日賣菅原十一三丁ハ天在一棚橋十三七丁
 ハ小天有哉月日如十六三丁ハ天有哉神樂良能小
 野ハあども有り此阿米の米字を書紀ハ妹と作りを
 母と訓ハ非あり契沖云昧梅メあども字智米小用ハ
 たりハ准りて知べく古事記ハ阿米濱成式ハ阿賣
 ハ作れりを證と爲て阿米と訓べし天と阿母と云も
 例無しと云り猶天若日子の喪と此記ハ此國小て
 の事と書紀ハ天上小ての事と爲り何れを是と

次歌ハ妹産孫
嗣有るも妹と
米の音も用れ
たるも何母の訓
すも所ありけ
者ありき

定む可しハ非^レ也雖^レ此歌ハ如此有と思へバ此記
の説當れり若天上^レて詠むハ天在やとハ断ハる
まドけれバあり^神と云れたるハ然^レハ説^レ古今序
あど小久方の天^レてハ下照姫^ハ始^レり^レと有^レ御
紀^ハ依^レて書^レたり^ハ有^レけ^レ深^ク正^レれ^レも
者^ハも所見^レざり^{あり}金澤^本ハ^レ凡^レて傍^ハ古事記^ハ
本^ハ書^レり又^レ口訣^ハも阿^妹奈^流夜^者阿^謎那^留也^と
注^レされ^バ此^妹字^ハ母^ハ訓^レ事^ハ古^人も心
用^レひ^爲たり[○]シ登^多奈^婆多^遍ハ古事記^ハも^ハ淤^登多
一^狀あり^那婆^多能^ハ有^レり記傳^ハも^ハ柵^機之^{あり}如此^狀云^ふ
淤^登ハ^人の^季子^と淤^登子^と云^ふ其^淤登^{あり}催^馬樂

の我門^ハ淤^登牟^須賣^又葦^垣淤^登與^賣あり^是
あり^儲季^子ハ^父母^ハ殊^ハ愛^{あり}物^{あり}故^ハ其^ハ
リ^轉り^て必^シも^季子^{あり}ね^{ども}賞^愛一^{なり}意^ハ
て^並て^美女^{あり}と^も淤^登某^と云^け此^ハ然^{あり}
柵^機ハ^機織^女と^云ふ^其ハ^古語^拾遺^ハ今^天柵^機姫^神
織^神衣^と見^え又^ハ万^葉の^歌ハ^柵機^津女^とも^柵機^とも
詠^ハ本^柵機^と云^ハ機^の事^ハ機^の構^ハ柵^{あり}故^ハ
然^云あり^其を^織神^{あり}故^ハ柵^機姫^と名^ハも^負給^ひ
又^凡て^機織^女と^柵機^津女^と云^ハ依^レて^歌ハ^彼織^女
星^とも^然賦^{あり}然^れハ^柵機^と云^ハ機^織女^の稱^ハ

小して我神代小聞也 但天棚機姫神の御事小在れ機
著る事ふるとや 他事取 織女の事小在れ此時未詠物せる神代小非ず是ハ其
下照姫命と味耜高彥根神との御祖と御在り坐す玉
依姫命の御名と頭し奉りて給へりありけり其傳十
九三百三十三丁二十丁廿一丁十九丁小注りが如く其天棚機
姫神と聞えりするハ謂ゆる栲幡千千姫命の御事小
て渡りて給へり其小對へて天棚機姫神と申す御名
御在り坐す御事とふ所見し給へりける然るハ
其大神と織幡神ともハ幡神とも申奉りハ更ふて肥
前風土記小謂ゆる織女神ハ正しく此神小て渡りて

給へりて以思ふ小此ハ御祖天棚機姫神の頸懸せる
玉の御紵の穴玉の御身の装束と爲りて御在り坐す
味耜高彥根神小て渡りて給へり由と知りて給へり
あり然るハ此神と天稚彥神と其形貌の見混ふ計小
相類て御在り坐ける故小然御怒坐て飛去給ふと
雖も猶其喪小會へり神等の疑ひ晴りけり其御
装束の玉と以て証し知りの給へり者とこりハ所見
なりけれんて上代小ハ物と証する小必其室器と以
て徴とハ爲り事小て譬へバ素戔嗚大神の天上小初
て昇りて給へり時小瑞ハ坂瓊之曲玉と持給へり事

ハ大御父伊弉諾大神より昇天の事を勅許し給へり
表物あり又神武天皇東征の御時より饒速日命と互
小天表を以て共其天神御子御在り坐す御事相証と
世給へりと同ト状あり有ける右の如く御祖神の
賦其御兄神あり事と衆人小令知給へり玉を以て証と爲し
けれ後世謂ゆる序歌と云物如く玉の事を云む
して殊更機織女おどと取出し巧事あり○汗奈餓勢屢ハ
小續け給ふと云ハ有す事あり
古事記小宇那賀世流と有り釋小所嬰也昔神人以珠
玉爲鎔頸と見え口訣小照頸也と有如く記傳十三
天十ハ契冲云所嬰あり日本紀小以其頸所嬰五百箇
御紡之瓊云万葉十六二十吾宇奈雅流珠七條

と詠り云宇那牙流を延て宇奈賀世流と云ハ古
言の常あり立少と多、世流佩ると波加世流と云
同格あり万葉十三ハ小纓有領中文光蟹手二卷流玉
毛湯良羅尔と有纓有宇那賀世流と訓べ取
云れなり右の日本紀と云ハ瑞珠盟約章第一一書小
出又其書三一書ハ含嬰頸之瓊と云事も所見なり
傳十六三十十八二十見り可一神名式小豊後國速見
郡宇奈岐日女神社と云神名の有ハ所嬰あり玉と装
束給へり意の神名あり也和名枚の項頸後也和
舉義あり可事云も更あり漢籍荀子小嬰處女嬰
宝珠と云事見えたり説文小嬰頸鎔也と云ハ字書小

△玉之御抄之あり
此事傳十五冊小安
玉の如く借釋
也關元於玉聯綴數
五今釋經也故於五
百箇御抄之玉に見
たり

繫也注せり ○多磨迺素磨屢迺古事記ハ多麻能須麻
流美須麻流迺と有ルハ此ハ脱字必有ベリ記傳十三
六十一ハ凡て歌々ハ物ハ同ト事ト再返一也又如此
聯けて疊ハ爲ハ昔も今も同ト事あり信ハ此歌ハ
ども如此疊ハたゞハてハ調ハ宜トハ此書紀ハ
第四句の終ハ迺字添りて此句の無ハ同言あり故
小後小誤りて美須麻流の四字を脱せるあり濱成式
ハ云物ハ也也麻能美須麻呂句美須麻呂能句と有り
此美須麻流迺の迺ハ坂瓊あとの瓊あり書紀ハ
ハ迺と有ハ何れハも宜トハ中ハ迺の方ハ今ハ

勝りて聞ハと云ハたり ○阿奈陀磨波夜ハ古事記ハ
ハ阿那陀麻波夜と有り阿奈陀磨ハ釋ハ穴玉也と注
して下ハ關元於玉聯綴數玉と有り波夜ハ玉相映之
言也と有り記傳十三六十九ハ玉ハ穴を穿りて緒を通
す物ありハ穴玉と云と契沖ハ云ハ信ハ然ハ言あり
阿那と歎辭と爲ハハ非あり楮波夜ハ光映ハエハ照曜
ハ云ハあり書紀ハ速玉之男神式ハ紀伊國牟婁郡熊
野早玉神社大出雲國意宇郡速玉神社陸奥國志太郡
敷玉早御玉神社此等ハ速早あとの借字ハ映ハエ玉の
意ありと思ハ可ト又羽明玉神の羽ハ映の意あり可

一又万葉十七丁七小多麻波夜須と云言也有也是也玉
映と云事あり偕此句ハ穴玉の如く光映と云ふ意
あり譬ふる物と云て如くと云意を添て心得るハ常
の事あり此波夜と云言ハ一首の眼あり取と注され
たるハ實小謂れたり但此ハ右三四下三ハも注る如く此
小穴玉映と云ハ其御祖神の玉を装束ハハハ光映
たふふて其御身の光輝と共小韻ひて五谷を照りせ
給へりよと譬たるのハハ有るべし口訣ハ何
弥者ろと續け釋みハ波夜弥ミと句と早也
と注一又讀穴玉早者自玉五穴令貫緒事寄于早速之
詞也と有るハ何の由也ハ
聞えず甚しき僻事ハあり也 ○弥多ハ記傳十三丁

一丁小美多迹三音契冲真谷あり万葉ハ真草を美久佐
三熊野と真熊野と詠るハ真と美と通音あり故ハ
り美山ハ真山の意ある可ければ美多迹ハ准るへ
知べしと云りと有が如一 ○輔施和施羅須ハ釋ハ二
渡也と有り記傳ハ布多和多良須ハ契冲ニ且あり和
多流と古言ハハ和多良須とモ云り濱成式ハ阿那
他麻婆夜美六と注して弥と上句ハ付け他尔不他和
他留七と注せられたるハ思東無一穴玉早と云て
ハ早々の義通下難と云り此二句ハ阿遲志貴神の
身の光の一谷を越て二谷まで照至ると云ふ即書紀

小光儀華艶映于二丘二谷之有是あり谷ハ丘の間
小在る物ありバ谷ニと云へバ其中ハ二丘ハ含れり
故ハ即二丘二谷あり此句ありて語と絶て心得べし此
句ありてハ我ハ人も皆目前見たる状と云りしハ次ハ
是阿遲志貴神ぞと言聞せたる意ありバあり次句ハ
引續けし見の時ハ終の曾也と云辞此二句まじりハ
故ハ其意明あらず能味ふ可しと云れたり○阿遅
素企ハ一句あり古事記ハ阿治志貴と有り須と志
も通へりありて別義有ハ非ず○多加避顧祢濱成式ハ
ハ阿遲須岐能可味と有り結りし金澤本ハ能加微曾也の

五字を異本ハ在る由ありて傍書せり若然とゆハ古
事記ハ多迦比古泥能句迦微曾也句と同ト事ありけ
れと末ハ一句の已くより脱て傳ハくざるふより然
らずハ濱成式ハ如く上句ありて結りたり記傳十
三七下ハ迦微曾也ハ今世の心あり能聞えて疑も無
けれど古語古歌ハ未見當らぬ辞あり且世字と假
字ハ用いたる事ハ此記中ハ例無し故歌ハ曾ありて
終りて也ハ唯書面の助字ハ置る計りとも思ハられ
ど歌の下ハ然助字を置る例ハ無れバ定め難くて
姑く曾也と云辞と爲つと云れたり一首の心ハ此飛

去給ふと天稚彦神と衆人の見混ふ事少く公在此也
 也天在や笄棚機姫神と申す御母神より傳はれ其
 所嬰り玉の御統の穴玉と装束ひし光映つて二谷ま
 照渡りせし其神味耜高彥根神少て御在り坐す
 やと其御祖神より傳はれ玉と以て証據と爲て令
 知給へり者あり 諸注共小序歌の如く心得て笄棚機
 之云と唯の機織女の状小注せり
 但右小注せり如く此の一人だふ有る事無きあり
 方ハ調ひて甚し 古事記の
 愛たむ者あり ○又歌之曰ハ傳世一 三百七
 十六丁 右 五丁
 小注も如く喪會者歌あり少て此ハ味耜高彥根
 神の飛去給ふ就下照姫命も其所と去て還らせ

給ふあびの事有つとを呼留と進くす爲小賦
 者と所見て此ハ下照姫命の小非水ハ又字此少てハ
 衍して實ハ上の故喪會者歌之曰と題せり歌是あり
 ○阿磨佐箇屢ハ神功皇后元年御紀小撞賢木巖之御
 魂天疎向津媛命と聞えさす大御名御在り坐り万
 葉一 丁十七 小天離夷者雖有二 四十 小天離夷之荒野尔
 三 十六 小天離夷之長道從六 三十 小天離夷部尔退九
 九 丁 小天離夷治尔登十三 十九 小夷離國治尔登 或本
 云天
 疎夷治 十五 小安麻射可流比奈乃奈我道并又 二十
 六丁
 安麻射可流比奈尔毛月波豆礼ニ杼母十七 十八
 丁 小安

小山越而往座君乎者あど其餘も多在と伊麻須ハ
往坐ヨキミの義あり由記傳卅九五丁小説有ハ如シ然ルハ
假字の伊マ往マの義有と以見ルハ此句ハ本より往坐イミ
めて仁徳天皇前御紀ハ伊麻羅車苦虚ハ呂破望開耐
伊斗羅車苦虚ハ呂破望開耐と有ハ往斬シと同心ハ
雖思往取リと心ハ雖思あり其三十年ハ夜芥之呂耳
伊辞鷄苦利夜芥と有ハ山背ハ往及け鳥山あり允恭
天皇十三年御紀ハ布儺阿摩利異鐵幣利去牟鋤ハ船
餘り往還り來りリあり雄略天皇十三年御紀ハ伊志
柯孺阿羅磨志と有ハ往不及ズ有リあり天智天皇

十年御紀ハ阿箇悟馬能以喻企波、箇屢と有ハ赤駒
の往行憚りあり如此く發語の以を往字の義ハ見
時ハ其理甚明クあり者ク？
但往字と伊麻須イマ
訓ハ右の如往坐イマ
小て往ハ本語坐ハ崇タカ云フ辞あり入座イマ或ハ在イマ字ハ
どと伊麻須イマ訓イマ訓イマハ麻須イマハ本語あり伊ハ發語の如
くして虚辞あり其義を誤り可クず記傳ハ右の往
坐と中古ハ御在イマ坐と云ハ當タ由イマ注イマと云ハ給
其ハ大座坐り略ありイマ此ハ右の往給イマ坐イマ給
ふハ云事ありイマ物ハ行イマ伊麻須イマとハ云イマ唯
小麻須イマと云と同例あるイマ同ト意イマハ
用イマふれども往坐の例イマハ自別あり
小て二言イマめてイマ一句あり即次ハ謂イマゆる石河ハ瀨門
小て下照姬命の其兄神の跡と逐イマして歩渡イマ給イマふ所
を云イマあり可イマ一イマ万葉十六イマ三十三イマ小室之浦之瀨門之崎有

鳴島之磯越浪亦所泊可聞十六二十小角島之迫門乃
 稚海藻者亦多有後。歌小石之瀨門大島の瀨門
 亦多詠是あり神名式小能登國羽叩郡瀨戸比
 古神社と申す御左一坐も右。瀨門あり處小依れり
 神名と所見たり出雲風土記島根郡條小朝酌促戸渡
 東有通道西在平原中央渡則笠互東西春秋出入大小
 雜魚臨時來湊笠邊略下と有ハ其瀨門と云事の狀と注
 世もハ如く文ありり口訣小以和多邏素西渡と一
 一釋少も雖不渡也言雖不得度之義也と云ハ纂疏注
 猶言雖不得來渡也と有ありハ大あり誤あり上古小
 詠物ありけりハ色と詠めて引けり○石以嗣箇播
 故小ニ言ありり同字數と成れり

ハ石川あり山城風土記ハ賀茂川の事と雖狹少然石
 川清川在仍名曰石川瀨見小川と有り又万葉二十四
 小且今日ハハ吾待君者石木貝尔一云交而有登不
 言八方又直相者相不勝石川尔雲立渡礼見乍將侶と
 有ハ此等ハ其地名と指ずり細礫の多く有ハ川ハ
 ち故小石川とハ云りあり此も其如くあり下照姫
 命の歩渡りて去給へり其川名と指ずりて打見たり
 任小石川とい詠る者ある可釋小石川也天河一名
 筭柵機と有り思寄せたりあり也と云るハ右の哥ハ
 説ハ本より後の妄作あり今云限ハ非ず其上天稚
 彦の喪ハ天上ゆくの事あり○箇拖輔智ハ口
 天安河と云と云ハ難り者あり

訣釋共小片洲也と注る如一新六帖小岸陰水の
 淀り片洲小釣を垂たる青柳の糸又片洲の水小浮
 たる青緑何を種とも無き世ありけり十六夜日記小
 此川堤の方ハ甚深くて片方ハ浅けバ川洲ハ深き
 心ハ有る人目堤ハ然ら塞りと有る是あり
 能通えたり契冲説ハ石有る川水ハ早き片寄て流
る所ハ必ハ片洲ハ出来るありと云ひ谷重遠ハ片
 洲謂偏深偏浅之水也と云共ハ謂はたり纂疏小片
 不深不浅處と注給へれども然平和あり流と片
 片洲ハ云り白井宗因ハ石川ハ片洲
と云枕辞あり石川ハ水ハ位ハ瀬ハ変り者あり片
 片洲ハ云り音信ハ疎と喻と云るハ非あり

塔磨風土記小記
 賀郡黒田里神之大
 羅野者昔夫矣
 老女張羅於表布
 中山以捕青鳥衆
 鳥多來負羅地云
 落於野一政曰羅
 野云

○阿弥播利和施嗣ハ口訣釋共ハ網張渡也と有か如
 一網ハ張と云ふ用語ハ例ハ仁徳天皇四十二年御紀
 小依網屯倉阿弭古捕異鳥献於天皇曰臣每張網捕鳥
 未曾得是鳥之類故奇而献之と有ハ更あり万葉十三
見え
 丁四小鳥網張坂千過十七丁四十小等奈美波里母利弊
六丁
 辛須惠底と有ハ網和名抄改獵具ハ鳥羅尔雅云鳥罟
 謂之羅和名度と見えたり是あり又此張と通して指
利阿美
 とも云りゆハ万葉三十三丁小久堅乃天歸月千網尔刺
 我大王者盖尔鳥有と有り此網字と網と誤りと
 の説ハ有る事あり十七丁小保登等藝須夜音奈

△捕り小保弊流死
小保等上等其須鳴
等比登都具安天
佐最麻之牛

都可思安美指者花者須具等毛可礼受可奈可年又
二上能乎底母許能母尔安美佐之底安我麻都多可
丁 伊米尔都氣追母と云例有り十九 十九 小霍公鳥雖
聞不足網取尔獲而奈都氣奈可礼受鳴金又管家万葉
小春霞網小張籠め花散くバ移ひぬ可き鷺留むあど
所見たりけれバ網小張と云ひ指と云多ハ鳥を捕り
料の羅と云あり水中小沈めて魚を取ら網ハ推古天
皇二十七年御紀小攝津國有漁父沈苦於堀江有物入
罟と所見たり万葉三十二 小網引爲跡網子調流海人
之呼色四 二十 小網引爲難波壯士乃七 十七 小網引爲

結
△雲里大記下巻
網捕魚と引網
捕魚と引網
下網捕魚と引網

海子哉見十一 二十 小住吉乃津守網引之浮笑諸乃得
于蚊將去あど有る是等ハ和名抄漁釣具小網罟廣雅
云罟 音古 魚網也と有て水中小沈めて引く物めて鳥
羅あどの谷又川面あど小張とハ別あり此と以て見
る時ハ此小網張渡と云ハ鳥を捕り料の羅の其下照
姫命の渡と給ふ石川片洲ある所小羅此を見
事と外小設る事無く其と取て詠りありけり契沖
彼夷津女の渡り瀬小片洲有る所小網小取附て沈ま
せトとて張直す又和施嗣ハ彼女を渡すと云や云
こと云らハ凡 〇妹盧豫爾ハ盧ハ助辞少て目録
て此小當くず 〇妹盧豫爾ハ盧ハ助辞少て目録
あり若て其妹ハ網の目小て散木集小思りしと頼め

一 事ハ網の目ハ溜る風ハ心ありけりあどふ是
あり其外ハ万葉十一十六ハ璞之寸戸我竹垣編目
従毛妹志所見者吾恋目八方古今恋五ハ花籠目並ぶ
人の數多有れハ忘るれめむ教ありぬ身ハ拾玉六
ハ罪知し報りと思へハ花籠目並ぶ人ハ一人ありぬ
とふじ垣ハ籠ハ其編目組目あどの有る物あり
其と目トハ云あり豫嗣ハ寄と云あり万葉二七十八
由縁母無真乃乃園ハ四十八ハ縁字無三外耳爲而七
三十八ハ目度雖見因縁毛無あど其他ハ多く縁字と
てハ豫嗣ハ用ひたりと又豫流と云ハ用ひたる例ハ其一

二十ハ天地毛縁而有許曾十五ハ秋田之穂向所依
片縁吾者物思あど此ハ常ハ多ハ事ハ枚擧るハ違
らず諸羅と張渡一置て待ハ鳥の羅ハ時ハ編目の一
ハ寄り物ありハ其夷女の石川と渡り行くハ此方ハ
寄來とせと呼留り序ハ置らありけりハ如目之縁の
如く心得べハ口訣ハ相見好ハ注セハ大ハ近ハ
謂ハ兄弟妹ハ之辞讓豫嗣ハ者美也ハ注ハ給ハ
ハ共ハ當らぐ次句ハ相照一見ハ其然ハ所以ハ
者ハ豫嗣預利據ハ縁寄來あり万葉九十九ハ
城國ハ不止將往來妻社妻依來西尼妻常云長柄一云
ハ毛婦十四十九ハハ波ハ多都安佐提古夫須麻許余
ハ長柄

比太尔都麻余之許西祢安佐提古夫須麻又ニト由布
氣尔毛許余比登乃良路和賀西奈波阿是曾母許與比
與斯呂伎麻左奴あど此例あり催馬樂我門乎小和加
ニ止乎止散加宇散祢留平乃已與之已左留良之也與
之古左留良之也又與之奈志尔止散加宇散祢留平乃
已與之已左留良之也與之古左留良之也あど有ら與
之奈之尔ハ無縁尔あり與之已左留良之也ハ不寄來
哉の義あり此句ハ網張渡せら其編目の縁カカ如く
小此方ハ寄縁來とせと其夷女の去と呼返せら者ら
る可く思えたり口訣ハ好寄來也と注せら好字ハ更
小由無一釋も豫嗣と吉也と注せ

らハ更ハ其意を得ら事あり上句ハ對照ハも更
小好とも吉とも注せる如く字義ハハ叶ハリけり
者をや又通證ハ石ハ万葉ハ哥共を引たる外ハ十一
卷十丁ハ大野ハ雨被敷木本時依來我念入と有と出
されたり石ハ二卷三十二丁ハ時ハと余理ハと訓
せられたる也此ハ其如クハ訓ベクハ登伎登と訓ベ
る所あり○以嗣箇播箇拖輔智ハ上ハ在る如く石川ハ
片淵とハ二句あり口訣ハ石川片淵者重詞と有ハ
如クハ如此ク上ハ在る詞を打返して再云時ハ其
意深く聞ゆハ故ハ置ら少シ其餘情云知ズ深く通
ゆる者あり即ハ雲神詠ハ夜句茂多菟伊都毛夜霸鉞
岐菟磨語昧尔夜霸鉞枳菟俱盧贈迺夜霸鉞岐廻と有
ハ如ク此も其石川片淵衰又ハ與の假字ハ添はると

同一意味あり契沖も雄略天皇十三年御紀歌も農播
 拖磨能柯彼能矩盧古磨矩羅柶制播伊能致志儺磨志
 柯彼能矩盧古磨と有る此略句も准より小詮と爲り
 物と返し云ありと云るハ信ふ然る言ひて万葉あど
 の古歌も多く此趣あり有て後人の及ひたり所此小
 在り事あり凡て上古の歌ハ詮物あり故ハ如此く要
 句と抽出打返し云故ハ聞く方ハ其
 韻と汲取て哀れ深く感くる事ありと中古よりハ
 唯調との主と爲り事ありガ爲ハ如此く打返し云
 あど。事を嫌ふ者と成り將今世ハ至てハ殊更ハ
 心弁しく成て人ハ媚を求るる愈下りて云ハ足
 ざる物なりハ○此一首の意ハ傳世一三百七上三十ハ
 成果あり注るが如く此ハ上ある阿奈妹奈屢夜の歌とハ作者

別ふして下照姬命の詠給へりハ非ず其御兄味耜
 高彥根神の飛去せ御在り坐訛下照姬命也其夫
 天稚彦神の屍ハ無き空しと處と守居給ふ可ハ
 非り故ふ引續りて其下照姬命も其地を去て還り
 せ給ふと爲て石川片洲と己小渡りせ御在り坐を見
 て天上より降來坐り其天稚彦神の妻子親族の神等
 の其と呼返し留め申す意めて詠れたる少石等喪會者
 の詠る者あり可く偕其殯斂の所ハ飛彈國荒城郡荒
 城郷荒城神社の地是あり可く思ゆれハ其地ハ荒城
 川と云有て郡名郷名と共に改りて後ハ吉城川と云

其天稚彦神之事
名殘無と可憐
下照姫命と
石川片洲の寄せし
其

其川を渡りて石川片洲と賦し者
あり可くや一首の意ハ天疎る夷女の往渡りす瀨門
あり石川片洲の其片洲あり所ハ羅と張渡りて有り
其羅ハ鳥の羅ハ時ハ編目。必ハ一ハ寄る事。有ハ如
く此方ハ返寄來坐て共ハ御在ハ坐せと云ふ其
向あり由を聞え知せむ爲ハ其石川片洲とい云結ハ
其實ハ下照姫命ハ狼到あり志と示せて本ハ處ハ寄
會ハせ申さむとて句を返ハ重言る者ありけり昔ハ
リ此歌ハ其時ハ狀とバ合セ考ゾハ故ハ口訣ハ
此歌ハ喪時以後詠之舉ハ所ハ疑と遺せり

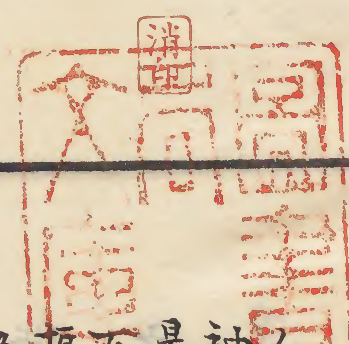
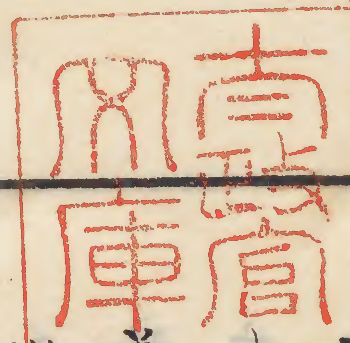
リ誰ハ然思ハ事ハ在れども己ハ此終ハ此兩首
歌辞今號夷曲と有て夷曲と云ハ右ハ河磨佐箇屢比
奈菟謠迺と云ハ句ハ取て曲名とハ成れりハ非ずヤ
然ハ古事記ハ此歌と舉ずハ終ハ此歌者夷振也
と云ハハ脱て傳ハくぬめて幸ハ此御紀ハ遺れり
故ハ夷振と云ハ曲名ハ所以ハ詳ハ知れり甚愛ハ
事ありを此歌意ハ能ハ跋ハ有て厭ハ甚
味氣無ハ事ありリ
記傳十三卷七十五下ハ
哥と云ハ此ハ載れりハ誤あり彼哥ハ別ハ上代ハ
誤と正されりハ更ハ由無ハ云ハ右等ハ
根神思下照媛所詠之哥也注ハ見ハ大意高彦

る所違へる者あり云
○此兩首歌辭ハ私記小布多字
多シ訓を注せり○今號夷曲ハ私記小比奈不利止奈
津久ニ有り古事記ハ後歌と漏せりあり云
此歌
者夷振也ト有り通證ハ夷曲因歌曲節奏名之非謂其
體製者此後人所呼之題號故記者以今字明其意耳ト
云ハ古今發明の說多ク猶入記傳十三
丁
九
て歌と記し此者某振也又某歌也ト云事記中ハ多
一其某振ト云ハ遠飛鳥宮段ハ宮人振天田振あり有
り續紀天平六年二月歌垣の中ハ難波曲倭部曲淺茅
原曲廣瀨曲ハ裳刺曲あり云名有り古今集大歌所歌

小近江振水莖振四極山振有り偕如此某振某歌ト云
ハ皆後ハ樂府ハて呼り名あり宇多麻比乃都加佐ト
云ハ雅樂寮の訓あり樂府ト書り字ハ神武天皇戊午
年御紀ハ是謂來自歌今樂府奏此歌者猶半量大小及
音色巨細此古之遺式也ト有ハ依り偕雅樂寮大歌
所樂所内教坊ありハ類皆樂府ト云ベ一上代ハ然
る官所有一あり抑此記書紀ありハ載りハ歌ハ何れ
も上代の多くの歌の中ハ優れて美し限ありハ多
クハ樂府ハ取れて管絃ハ係け儻ハ合せて奏い
歌共あり其中ハ某振ト呼ハ先振トハ俗ハ云ハ形狀

進止の布理め人小在れ物小在れ動く状を云も歌
ふてハ奏ハ音色トカミシカの長短巨細低昂あどの類あり諸樂
府小用うる歌ハ奏うる種々の振。有。故ハ其振
ハ各名を付て其振ハ云なり但其名ハ振を以て号
たり者ハ非ず唯其歌の首の詞を取て假ハ名けたる
者あり彼宮人振天田振又ハ古今集あど皆然り然れ
バ彼續紀ハ名のし出たり難波曲其余ハ皆推量つ可
し然りと今此阿米那流夜の歌ハ此那ハ言無
ハ夷振と名けし如何と云ハ書紀ハ此ハ二首並べ
ハ次歌の首ハ阿磨佐箇屢避奈菟謎逆と有ハ此避奈

ハ言と取れり然ハ阿米那流夜の歌ハ奏ハ振
の彼と全同トキ故ハ樂府ハ一部ハ收めて夷振と
呼あり其ハ此哥のしあど遠飛鳥朝段ハ夷振
之上歌又夷振の片下と云歌有り此等の歌ハ此那
ハ言ハ無ハ然呼ハ皆其の定あり神樂歌ハ前張
と云ハ前捺サバハ衣ハ捺ハ云と云ハ歌一曲の名あり
を他の哥共を係て十六曲の惣名ハ成て大前張ハ前
張と呼とも思合す可ハ此も其と全同トキをヤル
其振ハ云ハ皆其振と分む料ハ假の名ありハ振だ
ハ同ト哥ありハ幾首ありも合せて一ハ呼ハ事



本より然る可き事少く右の前張也然あり取と云れ
 一ハ信小盡と云たる説め有ける但此ハ右の兩
 首相並びて其同時の歌あるが故小片方ある避奈を
 以て名けて二共小曲節共小同トきを以て相通ハ
 夷曲と号けたる所以右も己小注も如ク然
 古今集序小下照姫ハ天若御子の妻あり思人の
 神の形丘谷小映りて光くと詠り延毘須歌ある可
 是等ハ字數も定り哥のやうも非ぬ事共ありと
 有て此夷振の事と然云誤事と成ゆるハ其集小其
 振と云ふ心得ぬ事あり此ハ夷曲の字小依て訓
 者少くして深ハ思ハザリ者あり又口訣小
 今号夷曲者不嚴辭而詠道名也と云ハ纂疏ハ夷
 曲猶言夷哥以言語侏離也と注させ給へハ其曲名
 多事と忘らせ給へハ説あるがり又或説小夷曲
 多夷秋の風と云事ありと云ふ多ハ愈僻事あり

